

到けいし	1 桂いたる	黄庭堅
桂嶺環	桂嶺環城如鴈蕩	桂嶺 城を環って鴈蕩の如し
平地蒼	平地蒼玉忽嶒峨	平地の蒼玉忽として 「噌峨たり
李成不	李成不生郭熙死	李成は生きず 郭熙も死す
奈此百	奈此百嶂千峯何	此の百 に 「 本 峯 を 奈 何 せ ん
桂林の山々	は街を取り巻いて	桂林の山々は街を取り巻いて、その有様はあの鴈蕩山のようだ。
平地に蒼い	平地に蒼い玉がいきなり聳え立っている。	立っている。
山水画の名	山水画の名手である李成はすでに没し、	でに没し、郭熙も死んでしまった。
この沢山の	嶺々の重なる絶景	この沢山の嶺々の重なる絶景を前にしてどうすることもできない。
《鴈		浙江省の東南にある山の名前で、春に鴈が帰るときこの山で羽を休めるので
	こう呼ばれた。	
《李成》	》 宋初の画家で山水画の第一人者。	の第一人者。
《郭熙》	》 李成に学び同様に山水画を得意とした。	水画を得意とした。

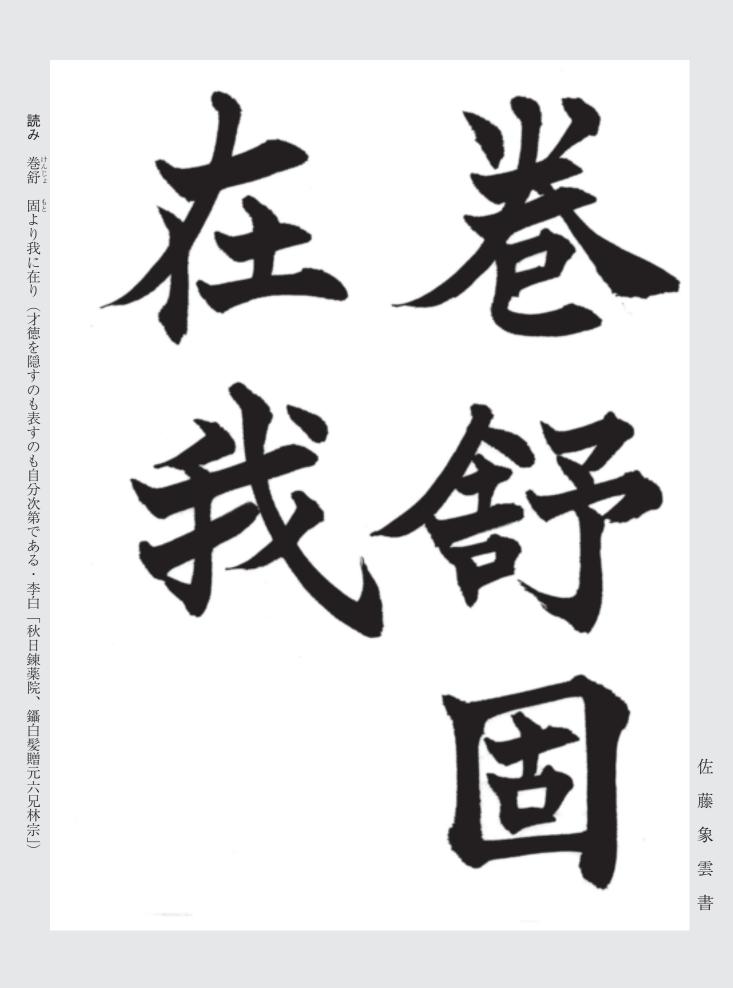
布されたことも知らず宜州で亡くなりました。 波乱にとんだ生涯を送った黄庭堅はこの詩を詠んだ翌年、大赦令が発 かったのは、その剛毅な性格とともに仏教思想による「諦観」もある 点もあります。たびたび流罪に処せられながら、詩に明るさを失わな 荘子の人間の苦を去って虚無自然に導く思想は、仏教の解脱と相似た また宋初に慧南が開いた黄竜派の禅宗の僧と親しく交わっています。 少年時代から親友黄介(こうかい)の影響で「荘子」を学びました。 持っていました。彼は詩中で「荘子」から多く引用していていますが ます。また道教の「荘子」と仏教(禅宗)思想に多大な興味と関心を 黄庭堅は多くの詩人たちと同様に儒教を思想・生活の根本においてい おいに関わってくるようです。 を感じさせません。そのあたりの心境は、黄庭堅の思想、宗教観にお のでしょうか。しかし、流謫の旅の途上で詠んだ詩にしては、悲壮感 桂林の絶景を前にして黄庭堅の胸に去来したのはいかなる想いだった まれたものです。 流謫の身で四月か五月ごろ桂林を通過していて、この詩はその時に詠るで た。宜州は桂林よりも、さらに西南の奥地にあり、六十才の黄庭堅は に禁書となり、その年の十一月に宜州(宜山県)流罪の命を受けまし 年の五十九才には国政を謗ったかどで、その文集は蘇軾の文集ととも 北宋の詩人黄庭堅は生涯を通じて激しい政争に巻き込まれました。晩 な心境を感じさせています。 流罪人としての悲哀はなく、この「到桂州」と同様にむしろ光風霽月 ようです。黄庭堅最晩年の二百三十日間の日記が遺されていますが、 十二月に鄂州(武漢)を出発し、約半年かけて宜州にたどり着きます。

条幅揮毫の参考

(9月30日〆切)



£



·般部規定課題(解説)



課題随意参考

草 書 行 書 ◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。 ※成家・師範の随意作品出品は二点までです。 次号課題 隷 書 十指長短有り 8

ペン字部課題

細字部課題

.....

(9月30日〆切)

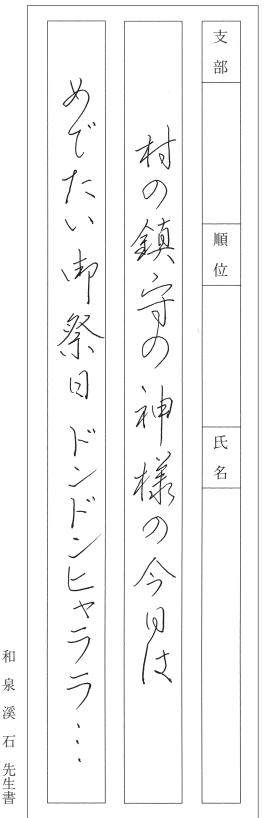
音

テンヒツリンシ キンコウジンチョウ

略解

鈞は指南車作りがうまかった馬鈞。任は釣り名人の任公。恬は初めて筆を作った蒙恬。倫は初めて紙を作った蔡僑。

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)



佐 藤 象 雲 書

溪 石 先生書

> 9

臨書の基礎講座



『相河南史君』

(1)

民のために行った事業の内容などを記してい 祀を行った次第を略述し、魯国の相として里 後碑は史晨の功徳を頌える趣旨で、孔子の祭 **廟碑」略して一般に史晨後碑と呼ばれます。** 碑は前回まで臨書してきた史晨前碑の碑陰 今月より史晨後碑を学んでいきます。史晨後 (裏面)に刻されていて、「魯相史晨饗孔子

書き手が一人ではないとの見方もあります はやや異なって見えます。このことによって ると字粒が一回り大きく、それ以前の書風と 前碑を習った方は全く違和感なく後碑の臨書 れています。 ための違いとも言われ、研究家の意見も分か が、これは立碑後、時を経てから追刻された が始められると思いますが、後碑の後半に入

を丁寧に追って臨書再現してください。 君」を臨書します。同時代の諸碑に比べ碑面 史晨後碑第一回目の今回は最初の「相河南史 の損傷も少なく佳拓も多いようですが、 原帖



(3)

[蘭亭]

を見すましてだまし取ります。この話は事実 す。太宗は監察御史の蕭翼を旅人のふりをさ 辯才は蘭亭を譲ってほしいという太宗の希望 は、智永の死後に弟子の辯才に渡りますが、 王羲之七代の孫の智永に伝承された蘭亭序 が、実に面白い話で興味が惹かれます。 愛した太宗が辯才から蘭亭序をだまし取った が書かれています。この蘭亭記の記述によっ た「蘭亭記」には、蘭亭序のさまざまな逸話 盛唐時代の何延之(七一三~七四一)が著し 気に一層拍車をかけたことと思われます。 宗の墓にに陪葬されてこの世から姿を消して かどうか知る由もありませんが、蘭亭序が太 らうまでに辯才と親しくさせて、辯才の油断 せて遣わし、隠してあった蘭亭序を見せても に対して持っていないとしらを切り続けま 伝説と化します。その中でも王羲之作品を酷 て、王羲之とともに蘭亭序そのものが一種の しまったことと併せて、その後、蘭亭叙の人 「賺蘭亭」はご存知の方も多いと思います